

# 随想



なつた私達夫婦が淋しかりうと、帰京を延期してくれたのである。出版社弘文堂の営業課長を夫に持つ次女は、家事以外は校正のアルバイトなどをしている、凡そ荒くれ仕事に縁のない女であるが、或日ふと、今日は私うんこを汲みま、と言いつ出した。山の中で汲取車も来ないしでなくともかねて糞尿は田畑に還元させるのを常としているわが家では、便所が溢れそうになる時出動するのは、従来通り肥担桶と肥柄杓とである。そして老婆はほかに色々忙しい仕事があるので、うんこの汲取りはほぼこの私と相場が決っている。

## 私の孫教育

北御門 二郎

東京から私の次女の楠緒子が、六歳と三歳の息子を連れてやって来て、暫くわが家に逗留していた。自分の妹の、つまり私の末娘の結婚式に出席のため帰省した序に、いよいよ山の中に二人ぼっちに

だろう。ママが便所へ肥柄杓を突っ込む時も、こわいもの見たさの表情を浮かべながら、柄杓の行方をのぞき込む。こらつ、ひっかかるぞ！ちよつとどいてろ！という次第。

難物の大便の方が片付いて、小便だけになると、作業はぐーっと楽になり、不思議と清潔感(?)が出て来る。そして作業を終わった後の安堵感、一種贖罪を済した後の悦びに似たものがある。これは経験者だけが味わうことの出来る悦びである。次女も、ああこれで私も、おおっぴらに便所にかがめる。と言つて晴々しい表情をした。

その夜私は六歳の孫に向かつて、ママは今日は何とて面白い事をしたんだよ。みんなの嫌がる仕事を進んでやったんだから。だからママはえらい人なの。お前も大きくなったらママのような人になるんだよ。と言った。

これが私の孫教育である。私は彼が将来、辛く汚く恰好悪い仕事は他人様に押しつけて、自分は柔らかな絹の衣にまつまれたエリートをめざす事を好まなれば、まさに教育の無血革命、受験戦争の弊も一度にふっ飛ぶだろう。先生方よ、進んでうんこを汲もうではありませんか！それによって、カントが哲学界に起こしたようなニコベルニクスの転回を、教育界に起こすではありませんか！

(トルストイ研究家)

水野 破魔子

## 熊本風土記のこと

夫も私も、本籍を熊本市に移してやがて三十年だから、レッキとした熊本人である。私の方は六十年も熊本に住んでいるので県民としての純度はより高い。その証拠に、熊本にはきらいな点がいくらもありながら、他県人が熊本の悪口を言うとかつたりする。彼の方はいつまでたつても故郷を離れず、二口目には北国の魚はうまい、北国の野菜はうまいと言ふ具合、彼は金沢、私は京都。

退職した彼が、菩提寺や図書館と何か手紙のやりとりをしている時は、今までは水野の家の先祖しらべであった。慶安何年とか致の水野余惣太夫というのは、結婚以来耳に慣れた御センゾ様の名である。ところがこの頃一寸興味を別の方へ行つたようだと思つたら、夏目漱石が、熊本高等工業の校長になつた桜木房記に、加賀室生の語を習つた可能性があるかということ調べてるのだそう。展覧

で金沢へ帰つたとき、向こうの郷土史家に頼まれたのだそうで河島舒文堂さんにもお尋ねしに行ったという。彼の外人離れした英語と、日本人離れした日本語としか知らない私は、驚いてしまった。そのうち話の中に黒木稼堂氏が出て来た。この人は明治三十年前後に五高の教授だった人で、金沢出である。

この人が書いた「熊本風土記」というのを読んだことがある。その熊本観を、同じ金沢出の夫の、口頃の口ぶりと較べて私はおかしくなることがある。少し抜けてみよう。

家具の無細工 家具はみな極めて粗末なるものを用ふ。その結構なる物と言ふは大かたむかしの遺物也。(熊本) 本の指物はどうしてこう難なのか、加賀の指物師は、というのが彼の口癖)

女の運葉 女の運葉なる。器物をわり損うこといふも更なり。尻まくりて歩くあり、女らしき所少し。それ故に力に至りては男を凌ぐ者あり。(ここを讀むと声を出して笑いたくなる。私の道具扱いが荒いと彼はよく言つ。彼は人間より道具の方が大事のようだ。そして、大掃除など力仕事はみな私にさせる。)

女詞の男風 詞も随つて荒く、幽婉の風なし、男に化する也。女は男に化し、町人は武士に化したる熊本風の也。すべて風俗は古來都は下より上

に登り、鄙は上より下に及ぶ。熊本もこれに外ならず。故に商賈に拙くして商業の地に非ず。(私自体はまあ詞とがめをされたことはないようだが、商店の人の詞つかいは、ナツトランといつてよく怒っている。)

彼は熊本風土記を読んだことはない。それでも黒木氏とどうも同じようなことを言つているとすれば、熊本人としては幾分かは肯い、反省も必要ということにもなりはしないだろうか。

(主婦)

## 末法の形相

植木 学

普通に田原坂戦争とは、三月三日を初日として三月二十日までの十八昼夜間、或は三月四日から三月二十日までの十七昼夜間をいう。前者は佐々友房の戦記日記や其他が採る所であり、後者は西南紀伝や其他が記録している所である。しかし戦場となつた田原・植木地区の地元

人達が「田原坂戦争の時にはああであつたこうであつた、あんなこともあつたこんなこともあつた」と、語り継ぎ聞き伝えて来た伝承からすると、田原坂戦争とは三月三日或は四日から、三月二十日までの戦争に限られていないようである。例えば田原坂戦争中の美少年として語り継がれて来た東野孝之丞が、萩迫の柿木台場に戦死したのは四月六日のことであつた。田原村倉掛の官軍編隊所に起こつた田原坂戦争中の肉肉事件とは、田原坂が落ちてから七日目の三月二十七日の出来事であつた。有泉村の池の川の鯉を薩兵が捕えて食つたのも、小野村の小野泉水池畔の小町社の小野小町の立像に、薩軍の将兵が恋慕したというのも、田原坂陥落後四月に入つてからのこと、すべて田原坂戦争中の出来事として伝承されているのである。従つて田原・植木地区の地元の人達の伝承を限り、田原坂戦争とは、官薩両軍が田原坂本道登り口に銃火を交え初めた三月四日から、薩軍が一兵も残さず田原・植木地区から撤退した四月十四日までの戦闘をいうのである。但し七本の柿木台場が崩れて田原坂が陥落した三月二十日を境にして、その以前と以後とでは、地元民心の動向に大変な変化が見られるのである。当初城北の民心は一目瞭然薩軍虜虜であつた。原因にはいろいろあるけれども、特に宮崎八郎等による変則植木中学校に廻つた自由民権党の啓蒙宣伝が大いに力があつたことは

疑うことが出来ない。

たしかに城北の大勢は薩軍を是とし官軍を非としたのである。而も薩軍は必ず官軍に勝つと信じていた。しかし三月二十日に田原坂が破れて以来薩軍の敗色が歴然となると、今までは進んで薩軍の使役に応じ物資金品を提供していた地元民も、ようやく薩軍を忌避するようになって、中には徒党を組んで官軍の使役に応ぜんことを願ひ出る仕末であつた。こうなると薩軍の焦燥には限りがない。勢い地元民との接触も粗暴になり、物資の徴発にも無理無礼があるようになって来て、民心はいよいよ薩軍から離れて行くばかりであつた。

ところで、私は田原坂戦争を振り返るたびに、地元民の変心の中に官軍に追われながら敗走する薩軍の後姿に、いろいろな感慨が湧くのであるが、人心が敗者(弱者)を捨てて勝者(強者)につくことは、世の常人の情として或は当然なことであるかも知れない。しかしそうであるにしても、余りにも力のある所に阿り、利のある所に追従して他を顧みない現代の凄まじい風潮には、つくづく末法の形相を感じないではいられないのである。

(植木町文化協会顧問)